

## 1 「霊山」英彦山

英彦山は北岳(1192M)・中岳(1188M)・南岳(1199.6M)の三つの山頂を持ち、福岡県内では釈迦岳(1231M)に次ぐ標高を誇る。山域は福岡県と大分県の県境未確定地域となっている。山の中腹 500m 近辺に英彦山神宮奉幣殿があり、多くの参拝客が訪れる。山頂には上宮がある。2005年(平成17年)10月には、英彦山神宮へ続く参道沿いに、参道起点の銅の鳥居横から英彦山花公園を經由して参道終点の英彦山神宮奉幣殿へ至る全長 849m のスロープカーが完成し、英彦山神宮奉幣殿まで約 15 分で行けるようになった。



英彦山は羽黒山(山形県)・熊野大峰山(奈良県)とともに「日本三大修験山」に数えられ、山伏の坊舎跡など往時をしのぶ史跡が残る。英彦山の開山は、継体天皇の 25 年(531年)北魏の僧善正上人の入山に始まる。さらに日田藤山村の恒雄が善正に師事して忍辱上人と称し、彦山霊仙寺の基となる草庵を開いたと伝えられている。この霊仙寺は明治の神仏分離までは、天台修験の別格本山として栄えていたが、以降旧境内地が英彦山神社となった。現在、霊仙寺の法灯を受け継ぎ、新たに霊泉寺として復興して、銅鳥居のすぐ右側にある。神話では天照大神の子が来臨して鎮座したので「日子山」となったといわれている。平安時代の弘仁10年(819年)、法蓮上人が嵯峨天皇の勅令で上洛し、日子山を「彦山」に改め、七里四方に及ぶ寺領を賜る勅願寺になる。

その後、鎌倉時代までに49の窟が整備され(「彦山流記」1213年)、山伏の修業が盛んになる。室町時代になると英彦山は、神事色が強まり、峰入りという修験道独特の修業が始まるようになった。英彦山より、宝満山、福智山に出て、得度を積む修業が始まった。戦国時代になると、各大名は血族を彦山座主に据えようと争いがおこり、特に豊後の大友宗麟との確執が大きく、多くの堂宇が焼き払われてしまった。その後、豊臣秀吉の九州平定の折に、七里四方の神領すべてを没収されてしまった。

江戸時代に入ると、小倉藩主細川忠興や佐賀藩主鍋島勝茂らの各地大名から多大な庇護を受けた。参道にある銅鳥居は寛永14年(1637年)にその鍋島勝茂によって建立された青銅製の鳥居である。鳥居正面の「英彦山」の扁額は享保14年(1729年)に霊元法皇によって下賜されたものであり、このときに「英」の字をつけた「英彦山」と称されるようになった。

江戸時代に入ると、小倉藩主細川忠興や佐賀藩主鍋島勝茂らの各地大名から多大な庇護を受けた。参道にある銅鳥居は寛永14年(1637年)にその鍋島勝茂によって建立された青銅製の鳥居である。鳥居正面の「英彦山」の扁額は享保14年(1729年)に霊元法皇によって下賜されたものであり、このときに「英」の字をつけた「英彦山」と称されるようになった。

江戸時代に入ると、小倉藩主細川忠興や佐賀藩主鍋島勝茂らの各地大名から多大な庇護を受けた。参道にある銅鳥居は寛永14年(1637年)にその鍋島勝茂によって建立された青銅製の鳥居である。鳥居正面の「英彦山」の扁額は享保14年(1729年)に霊元法皇によって下賜されたものであり、このときに「英」の字をつけた「英彦山」と称されるようになった。

## 2 大会コースのルートガイド 太字下線は主要地点

彦山駅から英彦山青年の家へ（1日目：隊行動）

彦山駅の駅舎を出て左へ150mほど進むと、三差路になっているのでこれを左に曲がり、踏切を渡る。車道を道なりに登っていき、2kmほど歩くと林道別所河内線の分岐（別所河内）があるが、この日はまっすぐ登っていく。さらに2km強歩くと、県道418号線に突き当たる。この道は九州自然歩道にもなっており、英彦山青年の家まで、この九州自然歩道を行くことになる。具体的にはこれを右に曲がり、県道を150mほど進んだところ（北坂本）で左に曲がる。途中、シカ除けのネットなどを通過して、行くと国道500号線に出る。この国道500号線をショートカットするように3回横切りながら進み、英彦山野営場、スキー場を経て、英彦山青年の家に至る。

英彦山青年の家から（2日目：チーム行動）

英彦山青年の家前の九州自然歩道に入り、左へ進む。国道500号線に「63カーブ」のところで出るので、左にこの車道を進み、高住神社へと上がる。石段を上がっていくと、右手に樹齢900年近くの御神木である「天狗杉」が出迎えてくれる。この木のすぐ後ろの階段を上ってもよいし、まっすぐ進み社殿でお参りしてから右に入ってもいいだろう。

とにかく、この境内から登山道が始まっている。砂防ダムの左側を上がったりしながら登っていくと、凝灰角礫岩でできた岩石群があり、400万年前の火山活動の跡がうかがえる。また、この辺りにはヒノキ、ツクシシャクナゲ、ゲンカイツツジ、イワタバコ、イワギボウシなどが生育している。さらに行くと望雲台分岐があり、ここは北岳・中岳（上宮）方面へ進む。急な岩場を登っていくと、木の階段がつくってあり、これを登りきったところがいわゆる「一本杉」と呼ばれている鞍部である。この辺りは落石させないように注意して歩こう。この鞍部を右に進路を取り、少し進むと岩場のロープがかけてあるところに出くわす。2本登る道がつけてあるが、手前の方が登りやすいだろう。いずれにせよ、慎重に登ってほしい。この難所を越え、さらに登っていくと北岳に着く。ただし、ピークは神仏習合時代からの聖域となっており、足を踏み入れることはできない。

ここから中岳に向かって行く途中は、西日本有数のブナ林で、その林床をクマイザサが埋めているのが特徴であるが、1991年の台風19号により大きな被害を受けている。



高住神社の入り口



一本杉

現在、ブナ林再生のための活動がなされているが、シカの食害もあり思うように進んでないように見受けられる。このようなところを進んでいくと、**中岳**に到着する。中岳には英彦山神宮の上宮がある。

中岳を越えて、南岳方面に向かうが、南岳は登らずに左の巻き道を進む。巻き道の途中で、鹿の角と呼ばれるピークに向かう分岐があるので、そちらに迷い込まないように気をつけてほしい。この分岐を右に進むと、南岳から下ってきた道と合流し、さらに下っていくと鎖が掛けている岩場がある。ここを慎重に下りきり、なおも下っていくと、これは安山岩の柱状節理で、材木を積み重ねたように見えることから**材木石**と呼ばれている岩が右手にあらわれる。この辺りはスギの大木やイヌシデなどがみられる。ここからの下りは大雨の影響などで道が付け替えられた跡などがあり、間違えないよう気をつけて下ってほしい。

このあと、男女でコースが変わる。

#### <男子コース>

この分岐を「鬼杉・玉屋神社」と書いてある方に進むと、8世紀から生育しているという**鬼杉**に到着する。鬼杉を巻くように道は続いているので、テープなどの目印を頼りに迷わないように進もう。上り下りしながら進むと、**玉屋神社**に着く。玉屋神社の少し手前には分岐があり、まっすぐ進んでしまうと林道に出してしまうので、気をつけよう。玉屋神社からなおもアップダウンを繰り返しながら進むと、三呼峠から来た道と合流し、ここから再び男女共通のコースとなる。

#### <女子コース>

この分岐を「英彦山神宮」と書いてある右の方に進む。しばらく行くと、大南神社・鬼杉方面への分岐があるが、これも英彦山神宮の方に進む。途中、土石流の跡をトラバースするようなどころもあるが、落石に気をつけて進もう。**三呼峠**を越えて下っていくと、**四王寺滝入口**がある。この辺りは弘法大師ゆかりの歴史を感じさせる場所でもある。さらにトラバース気味に進んでいくと、玉屋神社から来た道と合流し、ここから再び男女共通のコースとなる。



南岳の巻き道分岐



巻き道途中の分岐



男女コースの分岐点



合流したのち、900m進むと英彦山神宮の奉幣殿に着く。奉幣殿からは参道を下っていき、銅鳥居をくくると、国道500号線を横切る。この先も参道の続きであるが、少々石段が壊れかけているところもある。国道500号線の旧道を横切り、なお進むと、再びその旧国道500号線と掠めるように出会う。この辺りは唐ヶ谷という集落であり、ここも左側の道を行くと、ついには旧国道500号線にでる。ただ、50mも進むと三差路がある



銅鳥居下の国道を横切る

ので、これを右に曲がる。この道は昨日、別所河内内で起点の分岐点があった林道別所河内線である。これを別所河内まで行き、そこからは昨日も歩いた道を彦山駅へと戻ることになる。



国道500号線の旧道を横切る

※平成27年度全九州高等学校体育大会 第58回全九州高等学校登山競技大会予報第1号をもとに、平成31年4月に現地調査の上、加筆修正。



英彦山神宮 奉幣殿